

ウインブルドン

ラッセル・ブラッドン

池 央耿 訳



WIMBLEDON

ウィンブルドン

ラッセル・ブラッドン
池 央耿 訳

新潮社

THE FINALISTS

By Russell Braddon

Original Copyright 1977 by Russell Braddon

This book is published in Japan by arrangement
with John Farquharson Ltd.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

ウィンブルドン

ラッセル・ブラッドン ^{いけ ひろあき}池 央耿訳

印刷 1979.5.10 発行 1979.5.15

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社 郵便番号162/東京都新宿区矢来町71/振替東京4-808

電話：業務部 (03) 266-5111

編集部 (03) 266-5411

定価 1000円

印刷所 株式会社 金羊社

製本所 大口製本株式会社

©1979 Hiroaki Ike, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ウィンブルドン

檜舞台の苛酷な闘い

檜舞台という言葉がある。何の世界であれ、ひとたびその道を志した者なら誰しも最後に行き着くべき場所として夢に見る目標である。カーネギーホールがあり、メトロポリタンがある。スカラ座があり、コヴェントガーデンがある。他にも例を挙げようとすればいくらでも数えることができるだろう。

スポーツの世界にもそれがある。テニスの場合、さしずめフランス、オーストラリア、アメリカ、イギリスのいわゆる四大トーナメントがそれに当たることは、テニス愛好家なら誰でも知っている。そして、必ずしもテニスに馴染みはなくても、イギリスのウィンブルドンがテニスのメッカであることをご存知の読者は少くないはずである。ウィンブルドンはテニスの世界の檜舞台中の檜舞台である。

ここに訳出したラッセル・ブラッドンの小説『ウィンブルドン』は、その檜舞台に立つ二人の若い天才的プレーヤーの死闘と、同時進行するある犯罪事件をサスペンスふうを描きつつ、極限における人間のさまざまな姿を浮き彫りにした闘いの物語である。

原題は“The Finalists”である。日本語に直せば決勝進出者であって、これはスポーツばかりではなく、例えば音楽のコンクールなどでも最後の審査に残った出場者を指して言う。すなわち、こ

れは選抜かれた者の意味である。

選抜かれるということは、とりもなおさず自らの力において生き延びることに他ならない。ファイナリストは、だから勝負師なのである。テニスとはもすれば優雅な紳士的なスポーツと思われるが、実際には数あるスポーツの中でも、最も勝負師魂を必要とする競技の一つではなからうか。現在ラケット一本を手に世界を転戦して歩くいわゆるプロのプレーヤーは、ある資料によれば男女合せて九百人近いという。ラケット一本が元手である点は変りない。にもかかわらず、一方には富豪並みの暮らしを楽しむ選手がいると同時に、片方にはホテル代にも事欠く選手がいる。実力が物を言うスポーツの世界なら当たり前のことではないか、と言ってしまえばそれまでの話だが、翻って考えれば、実力さえあれば、浮かび上がるチャンスが開かれているのであって、そこに彼ら勝負師とその予備軍の生甲斐があるのであろう。テニスがハングリー・スポーツであると言われる所以である。

昨今、日本でもテニスが余暇のスポーツとして定着しつつあるためでもあろうか、テレビで世界の強豪の試合を見る機会が多くなった。常にファイナリストとして名を連ねる彼らはそれぞれに人を惹きつけるものを持っている。体力と技術と精神力が絶妙にバランスした名手のコート上の所作は美しく個性的である。加えて、彼らの試合運びは極めて頭脳的である。それは純粹に論理の競技であるチェスや将棋をさえ思わせるものがある。

もともとテニスはそうした知的な面白さを持った競技だと思うが、競技者にとって最もやり甲斐があり、観客にとってその面白さが最も明らかなのはシングルス試合であろう。コートの上で一対一で向き合った選手は互いに衆人環視の中でまったく孤独である。自分以外に頼るべき誰もい

しない。極度の緊張がのしかかって来る。選手は何よりもまず自分自身に打ち克つことから始めなくてはならない。勝負はコートに出る前からはじまっているのである。試合が開始されれば、彼らは互いに持てるものすべてを出し合って闘うしかない。

テニス愛好家にはもとより説明の要もないことながら、たった一つのボールをネット越しに打ち合うという、基本的には極めて単純なこの競技も、それを構成する技術が多彩である点ではあらゆるボールゲーム中でも群を抜いている。これは、競技者がコートの中にあつて広い範囲を一人で守らなくてはならないテニスの成り立ちに由来することではなからうか。それは、例えばボールを高々と打ち上げ、時には相手方の頭上を越えるロブという打球がテニスにおいてはあり得ないことを考えればよくわかる。ネットを越えて来たボールがコートに落ちる前にこれを叩き返すボレーについても同じことが言える。

ボールの回転にしても、それ自体は決してテニスの専売ではないけれども、スピン、リバース、カット、スライス、チョップ、ドライブといった変化は、あのガットを張ったラケットとフェルトに覆われたボールの微妙な触れ合いから生まれて来る。ガットが楽器の中でも特に繊細な音色を身上とする弦楽器の糸と同じものであることを思うとこれは大変興味深い。

それはさておき、ファイナリスト・クラスの試合では、ボールがラケットに触れれば、その一球はほぼ確実にリターンされるであろう。だから、いかにして相手の守備を崩し、あるいは脇を抜くかがかけひきの焦点となるのである。テニスには一挙大量得点ということがない。一ポイント一ポイントの積み重ねで試合は進んで行くのである。それは、テニスの試合が時間との闘いだということでもある。

小規模な試合なら三セット・マッチで二セット先取で勝負が付くが、四大トーナメントやそれに準ずる大きな試合は五セット・マッチ、三セット先取が原則である。

周知の通り、テニスのカウントは15—0（ファイフティーン・ラブ）にはじまる。最初の一ポイントがファイフティーン、ラブは0点である。0をラブと呼ぶのは、この数字を卵に見立ててフランス語の *Leuf* から転化したものであろうというのが現在ではほぼ定説になっている。第二ポイントが30（サートイ）、第三ポイントが40（フォーティ）。そしてどちらかが四ポイント取って1ゲーム。これを重ねて一方が6ゲーム先取するか、または双方5ゲームずつ取った時にはその後2ゲームの差が付いたところで1セットが終る。この2差の原則が一つのゲームの中でも反復されていて、双方が三ポイントずつ（40—40）持ち合った時には次の一ポイント、アドバンテージを経て二ポイントの差が付くまでゲームは延長される。これがデュースである。

現実にとのようなことが起こるのかと言えば、両者の実力が拮抗して互いに一步も譲らず、ポイントを取り合った場合、デュースは無限に繰返される上に、二ゲームの差が開かずセットが長引くこともまたあり得る。

近くは一九六九年のウィンブルドンでアメリカ選手のゴンザレスとバサレルが二日にわたって百十二ゲームという大試合を演じた。もつと凄い記録がある。一九六三年にアイルランドのベルファストで、イギリス選手のムーアとオラリーがゲーム数百三十六という気の遠くなるような試合をやつてのけた。これは三日間にわたる八時間半の長丁場であったという。

現在では、タイブレークという、ある時点で勝敗を決する規則が設けられているから、このような試合はないが、世界中から選りすぐった強豪が集まる大試合では屢々これに近い熱戦が展開され

る。

おそらく、人間の耐久力という点で彼らは限界に挑んでいると言って間違いない。檜舞台に立つということは、そのような苛酷な闘いに耐えて生き抜くことである。そして、それはテニスに限ったことではなく、スポーツだけに言えることでもなく、およそ何の世界であれ、そこでのファイナリストが常に人を感動させる姿である。そんなことを思いながら、私はこの小説を翻訳した。

訳者

十七歳のヴィサリオン・ツァラブキンは、テニスコートでは胸のすくような試合ぶりを見せ、また、コートを離れても、彼は実に気の好い愛すべき青年であった。文明は、その屠殺場さながらの抑圧や、警察、軍隊、そして政治の力によって、彼の動物的本能、すなわち、獲物を追いかけて殺し、あるいは、敵に報復し、敵を圧倒しようとする本能を鈍麻せしめていた。ソ連チャンピオンという特権的地位は、彼を飽くなき欲望という人間の罪から解放していた。

二十三歳のゲイリー・キングはそのような抑制とは無縁であった。それは何も、ツァラブキンにくらべて彼が時代遅れであり、あるいは、より理想主義的であるという意味ではない。要するに、彼はなかなかのしたたか者であるというにすぎない。彼は叔父の土地でカンガルを撃ち、羊を殺して育った。寄宿学校では陸上競技と水泳に精出した。ボクシングも囁った。そして、テニスコートでは十一の年

以来、彼のただ一つの目的は勝つことであった。

世界第二位の選手として、彼はこのところ常にその目的を果たし得ている。第一位のスコット・デニスンと当たった時を別とすればである。デニスンを憎む気持は他の選手たちと同じだったが、キングは決してそれを表には出さなかった。もともと、時に軽い愛敬を覗かせる他は、キングは感情と名の付くものを滅多に表すことがなかった。おそらく、軽い愛敬を披露する気になる他は、彼は滅多に何かを感じることもなかったためであらう。もっともそれは、ニュー・サウス・ウェールズ・ローン・テニス選手権試合の第二回戦でヴィサリオン・ツァラブキンと会う以前の話である。キング、デニスン、そしてツァラブキンにとって、この出会いはその後のすべてを変えるものであった。

「今日の相手、何ていう名前だっけ？」ホワイト・シテイの更衣室へ向う途中、キングは大会役員の一人をつかまえて尋ねた。

「ヴィサリオン・ツァラブキン」役員はキングが手に提げているヘルメットを非難がましく見やうて言った。ゲイリーはそのうちきつとあの死の車^{デス・ワゴン}で命を落とすに違いない。オーストラリアは当代屈指の名選手を失うことになるのだ。「正審はマザー・マラプロップの御老体じゃありませんように、と言っても無理な注文だろうなあ」キングは言っ

た。ハロルド・マロリーはいい審判だったが、ただ困ったことに、外国人の名前となるとスミス以外は何としても正確に発音できないのだ。

「残念がらね」

「で、何ていうやつだった？」

「ヴィサリオン・ツアラプキン」

「どんなやつ？」

「十七になったばかりだよ。国外の試合はこれがはじめてだ。ロシア人たちは、そのうち彼はコカコーラの発明以来ソ連最大の売りものになると言っているがね。まあ、今回のところは芝に馴れるのと、アンドレイエフと組む練習だな」

「ツアラプキン君も気の毒に」キングは同情する口ぶりと言った。アレクサンドル・アンドレイエフは悪名高い、パトナー泣かせの陰気なダブルス・プレーヤーだった。

役員は時計に目をやった。「早く着替えた方がいいぞ、ゲイリー。ツアラプキンは更衣室にいるよ。ブロンドのもじやもじや頭で、字引を持っている」

「何だった？」

「英語の勉強をしているんだ」

役員が言った通り、ツアラプキンは見間違えるはずもなかった。亜麻色の髪をして、露英辞典を読み耽っている青

年はオーストラリア広しといえども、そうやたらにいるものではない。

「やあ」キングはヘルメットを左手に持ち変え、右手を差出して言った。「ゲイリー・キングだ」

ロシア人青年は立ち上がり、小さな字引を左手に持ち変えてキングの手を握り、軽く会釈してにっこり笑った。そして、彼はまっすぐな黒い眉の下の灰色の目でオーストラリア人の顔を上げしげと見つめた。

キングは愛想よく視線を返した。ツアラプキンの肌は艶やかに陽焼けしていた。がっしりとした頸。きりりと引き締った筋肉質な脚。ブロンドの髪と黒い眉の際立った対照。「女の子が大騒ぎするな」とキングは思った。

「スコアの数え方はわかったかい？」字引を指さして彼は尋ねた。彼自身、コールが英語でないとスコアがわからなくなってしまうことがよくあった。

ツアラプキンはにやりと笑った。「フィフティーン・ラブ、サーティ・ラブ、フォーティ・ラブ、マイ・ゲーム。フィフティーン・オール、サーティ・オール、サーティ・フォーティ、デュース、アドバンテージ・ツアラプキン、ゲーム・トゥ・ツアラプキン」彼は歌うように言った。

「デュース、アドバンテージ、ゲームか、え？ 油断のならない相手らしいな、君は」

言葉はまるで通じなかったが、その意味は完全に理解してツアラブキンは声を立てて笑った。アンドレイエフは決して冗談を言わない。

キングは着替をはじめた。

ツアラブキンは字引をシューズのポケットに押し込んで腰を降ろすと、ラケットを一本取って両手で軽く持ち、強靱な両脚の間でそれを前後に揺りながら無遠慮にキングを見つめた。彼はそれまでキングをフィルムでしか見たことがなかったが、世界中の誰のテニスよりもキングのテニスに敬服していた。

スコット・デニスのテニスはあまり感心しなかった。

フィルムで見た限りでは、この世界チャンピオンは強烈なサーブと、破壊的ときえ言える両手打ちのバックハンドに頼りすぎる嫌いがあった。コーチたちに吹き込まれて、彼は誰であれ両手打ちのプレーヤーには疑いの目を向けるようになっていた。

「グラランド・スラムをやつてのけたのは皆正攻法のプレーヤーだ」コーチたちはことあるごとに彼に言った。「マグラスやプロミッチからコナーズ、ボリイ（ボルグ）に至るまで、両手打ちのプレーヤーは必ず試合運びの上手い正統派のプレーヤーにしてやられている」ツアラブキンは、近い将来変則派のデニスンが正統派のキングに敗れる日が来るに違いないと確信していた。そのキングは今、あたりを憚るふうもなく素っ裸のまま、サポーターを捜してロッカーを掻きまわしていた。

裸のキングはフィルムで見た服を着た姿よりもプロポーションがいいことにツアラブキンは気が付いた。ダイバーのようだ。当然のことながら、右前腕は見事に発達している。脚は見るからに強そうだが、太くはない。形のいい頭はやや意外だった。フィルムでは黒く見えた髪は茶色だった。そして、前腕と脚と胸には陽光に晒された金色の毛が生えていた。おまけに、キングはだらしかなかった。脱いだ服を彼は無造作にロッカーに投げ込み、同じだらしなさで試合用の服を着た。

ツアラブキンにとってはテニスのための白いシューズとシャツ、ソックスと靴は宗教的儀式の衣裳にも等しかった。そのような無造作な態度は、他の者だったら許せない。しかし、キングなら許すことができる。何故ならば、このオーストラリア人は久しい以前から彼自身に優るとも劣らないテニスに対する献身を示していたからである。とはいえ、ヘルメットだけは彼の宗教の祭司にはあるまじき揃えであった。ヘルメットはレーシング・カーやオートバイに乗るためのものである。キングがそのようなことを許されているのはツアラブキンには信じ難かった。

「さあ行こう、白無垢^{ヌイ}」キングは言った。コートに出るべき時間にすでに一分遅れているのはツアラブキンのせいだともいう口ぶりだった。「お客さんを待たせちゃあ申し訳ない」

コートへの出口で脇へ避けてツアラブキンに先を譲りながら、キングは相手がラケットを二本しか持っていないことに気付いてびっくりした。彼自身は五本持っていた。二人が並ぶと、キングの方が頭半分背が高かった。観衆のどよめきと拍手を浴びて二人は審判台の方へ向った。ロシア人選手ははにかんだような笑顔を浮かべていた。キングは内心思った。「どうして俺はラケットを五本も持っているんだ？ ガットの強さはみな同じだ。今まで三本使ったことは一度しかない。普通は二本だっていりはしないのだ」審判台の下にラケットを置くと、彼はそれを顎でしゃくってツアラブキンに言った。「君の考え方でいいのかも知れないな」

いつもアンドレイエフからラケットを一抱えコートに持ってきて出ないことを非難されているツアラブキンは、肩をすくめて低く言った。「ドヴフ・フヴァティト」キングには通じなかったが、二本で充分、という意味だ。

「ああ」キングは試合が終るまでずっと使うことになるであらうラケットを回して言った。

「ラフ」ツアラブキンが言った。

「ああ、ラフだ」キングが言った。

ツアラブキンはサーブを取る仕種を見せた。キングは屋根のあるスタンドとは反対のサイドに彼を押し遣った。ツアラブキンは首を垂れて、馴染のない芝の香を味わいながらゆっくりとベースラインまで歩いた。コートの滑らかな表面と、そこに白線によって描かれた完璧な幾何学図形は彼の目に心地よく映った。

ボールボーイが彼にボールを投げた。驕ったところは微塵もない態度で、彼はもう一つ、そしてさらに三つ目のボールを要求した。三つのボールを左手に持ってキングに向きなおると、彼はその瞬間をじっくり味わおうとするかのようにびたりと静止した。と、無駄のない流れるようなスイングで、彼はキングのフォアハンドに低く深くボールを打ち込んだ。三分間のウォーミングアップがはじまった。

強いトップスピンのかかった速いボールがバックハンドに返って来た。彼は軽やかに足を運んで、きれいにそれを受けた。長いラリーが続いた。互いに相手をふりまわそうとはせず、ともに打ち合って、よく走った。二十打目を返したあたりでキングは、これは自分がエラーしない限り終りそうもない、と思いはじめていた。どうやらツアラブキンは決してボールをネットにかけることなく、コートの

外に弾くこともなく、永久に打ち続けることができるかのようであった。

ラリーの三十二本目のストロークでキングがネットすると、観衆はソ連選手の美しいフォームとオーストラリア選手の豪快な打球に大喜びで拍手喝采した。

「ウォーミングアップに拍手か」とキングはいささか面喰った。

ツアラプキンは今一度彼ににっこり笑いかけた。それは、芸術家同士の連帯を意識した笑いであった。そしてその瞬間、キングは彼とこのロシア人青年が今テニスの奇蹟を演じようとしているのであることを悟った。

ウォーミングアップは続いた。彼らは交互にネットに出てボレーやスマッシュを打ち込んだ。サーブの練習に移ろうとしてゆっくりネットを離れながら、キングは背後でツアラプキンが立て続けにボールを三つ叩く音を聞いた。肩越しにふり返って、彼はその第一球が大きく頭上を越えて行くのを見た。第二球はそれよりもさらに高くネットを横切り、そのすぐ下をなぞるように第三球が飛んだ。三つのボール、二つの高いトスと強烈なトップスピンのかかったロブは揃ってベースラインに落ちた。ツアラプキンはどんな相手がネットに出て来ようと、そのショットが完璧なものでなければたちどころに撃退するぞと高らかに宣告した

のだ。

彼らはサーブの練習に移った。ツアラプキンがボールを四つ左手に掴み、息もつかせずフォア、バック、フォア、バックと交互に打ち込むのを見て観衆は息を飲んだ。一方のキングはボールを一つポケットに押し込み、もう一つを五度地面に弾ませてからサーブした。ボールはネットした。それを見て観衆がどっと沸くと、キングは彼のラケットをツアラプキンに差出した。ツアラプキンににっこり笑ってそれを断った。

「アー・ユウ・レディ？」マロリー氏が声をかけた。キングはベースラインの後方で位置に着いた。ツアラプキンはボールボーイからボールを三つ受取った。

「ツアパルキン・トゥ・サーブ」マロリー氏はコールした。観衆の間に失笑の波が広がった。「プレイ」

次いで展開された四セットを誰よりも楽しんだのは敗れた当のツアラプキンだった。ラリーは果てしなく続いた。彼らは互いに計算しつくされたロブで再三相手をネットから後方へ追いやった。そしてツアラプキンはさして無理をする様子もなく、繰返しキングの得点打と思われた球を拾い、新たなラリーの展開を誘った。

ツアラプキンはラケットを持つ手を一杯に伸ばし、水平に宙を飛んで、四フィートを余してパスすると見られたバ

ツクハンドのドライブを見事に返球して第一セットを7―5で取った。観客の中の八十代の老人の何人かは、かつてボロトラが度々そのような離れ業をやつてのけたことを思い出した。ボロトラの伝説をツアラブ・キングはものの本で知っているだけだったが、一九七六年にパナッタがネット際で、横様に体を投げ出してよもやと思われた球を返したのをビデオテープで見た。彼は伝説もテープで眼のあたりにした現実も決して忘れてはいなかった。

彼は同じようなダイビング・ボレーでセット・ポイントを二度逃れたが、第二セットはキングが7―5で取つてタイに持ち込んだ。

第三セットでツアラブ・キングは四ゲーム取った。テレビのアナウンサーは言った。「これは実に驚異的であります。ゲイリー・キングは時にスロー・スターターではあります。が、第三セットは絶対に落とさないことで世界的に知られている選手です。事実、ウィンブルドンの現チャンピオンスコット・デニスも含めて、キングとの第三セットで6―4以上のスコアに持ち込んだ例はほとんどありません」

第四セットはそれまでのどのセットよりも長時間におよんだが、ゲーム数はそのどれよりも少なかった。キングがツアラブ・キングをふりまわし、ベースラインに迫いやって、ネットに出て低い球を決めるには目も覚めるばかりのトッ

プスピン・ショットを十数本も繰り出さなくてはならないのが常であった。ボールは確実に空いたコートを衝かなくてはならなかった。攻撃の効果によるものであれ、自身のミスによるものであれ、ツアラブ・キングはエラーということを知らなかつたからである。

にもかかわらず、ツアラブ・キングは三度（そのうち二度は彼自身のサーブでゲーム・ポイントだった）キングをのっぴきならぬショットでサイドラインに追い詰めておきながら、喜び勇んでコートの外に飛び出し、明らかにアウトの球をボレーして惜し気もなくポイントを失った。

二度目にツアラブ・キングの勇み足に救われてサイドを変え、キングは恩に着る口ぶりで彼に注意を促した。サイドラインを指さしてキングは言った。「僕の球は一マイルもはみ出していたんだぞ」ツアラブ・キングはきょとんとした。キングはサイドラインに歩き、自分の球が落ちたはずの位置をラケットで突つついた。ツアラブ・キングはいささかも悔む様子はなかつた。キングは審判台の陰の自分の椅子に戻つて汗を拭いた。習慣に従つて、ツアラブ・キングは彼と背中合わせに坐つていた。ふいにツアラブ・キングの聲がした。「いやあ、いいテニスだね」キングがふり返つてみると、ツアラブ・キングは椅子に跨つて彼の方を向き、新しい言葉を捜して字引を繰っていた。